

## 「衣生活」からみた住み方に関する研究

## (第3報 「衣生活と住み方」の実態と意識)

奈良女大家政 ○今井範子 中村久美 余財章子

目的：第3報では、着衣服の状態と住空間とを対応づけることで、公私の領域を明らかにする。日本の一般住宅ではねまき姿のみならず、下着や上半身裸姿までも公室に及んでいることを先行調査において明らかにしたが、浴室を私室側に配置した「欧米的」平面を持つ住宅ではどうか。さらに私室側における着衣の状況を明らかにする。

方法：第1, 2報に同じ。

結果：公室でのねまき姿は8割を超え、一般住宅より若干少ないものの、ねまき姿の領域が公室空間に及ぶ状況にかわりはない。さらに下着姿、上半身裸姿は、一般住宅よりかなり少ないものの、それでも3~4割みられる。ねまき姿に対する意識をみると公室でのねまき姿は少々見苦しいとする者が若干多いものの、それほど差は見られず、またどんな恰好でもかまわないとするものも2割程度あり、「衣姿」に対する寛容さは、平面に影響されず日本の特徴と言える。一方、私室側での「衣姿」みると、6割以上が下着姿や上半身裸姿で寝室-浴室を行き来しており、意識のうえでもその気楽さを評価している。ただしアクセス別にみると、私室アクセス型では下着姿や上半身裸姿で寝室まわりをうろうろする者が公室アクセス型に比べて少なく、意識においても、「多少気を使う」「浴室が公室側にある場合と気持ちのうえで何ら変わらない」とする者の割合が多い。玄関-戸外と接する緊張感によるものと考えられる。最後に公私の区別の明確な住宅に住んで、住生活上、公私のけじめを意識するものは3割にすぎず、日本住居特有のあいまいな公私領域を意識の上でも裏付けている。